ブロンテ書簡研究（3）

英語教室　岩　上　はる子

（七）1840年

1840年の前半はブランウェルをのぞく姉妹全員がハワースにいた。シジウイック家での家庭教師をわずか2カ月で辞めたシャーロットは39年7月に帰宅し，アンもまたインガム家から解雇されて12月には戻っていた。ギャスケル夫人はこの間のブロンテ姉妹たちの話題の中心は学校経営であったと推定している(『シャーロット・ブロンテの生涯』第9章)が，エレンへの手紙ではそれを示唆するものはない。わかっているのは次の家庭教師の職探しに，シャーロットがあまり積極的ではなかったことである。彼女がようやく腰を上げたのはシジウィック家から帰ってから半年後であった。だが40年1月には熱心な求人を断り(1840年1月24日付け)，秋風が吹き始めた頃にはイソップの蟻とキリギリスの寓話を引用している（1840年9月29日？付け）が，けっきょくシャーロットが仕事に就いたのは，ホワイト家に赴任した1841年3月になってからである。

1840年のエレンへの手紙の多くは「愛と結婚のことばかり」(1840年5月15日付け)というように，エレンの結婚話や前年の夏に赴任した牧師補ウィリアム・ウェイトマンをめぐる話題が中心になっている。シャーロットは前年の3月にエレンの兄ヘンリ・ナッシーの求婚を「結婚する相手に対して抱くべき深い愛」(1839年3月12日)を感じられないという理由で退けていたが，エレンには「'灼熱の恋'などというものは'大いなる狂気'なのです」(1840年11月20日付け）と述べ，現実的な結婚のアドバイスをしている。しかしその一方でシャーロットはウェイトマンの一挙手一投足に強い関心を示し，彼に魅了されていたのはこれまで信じられていたようにアンではなく，むしろシャーロット自身ではなかったかと思わせる（Juliet Barker, *The Brontës,* Phoenix Giant, London, 1995, pp. 324-329）のである。

この時期，エレンへの手紙では触れられていないが，シャーロットは出版を意図して創作している。「アッシュワース」として知られる未完の作品がそれで，執筆時期は1839年末から40年にかけてと推測されている。シャーロットは原稿を40年の夏の終わり頃にH. コールリッジに送って，出版の可能性をたずねた。コールリッジの返事は残されていないが，それに対するシャーロットの礼状は下書きと投函された手紙の両方が残されている。シャーロットがコールリッジに手紙を書いた背景には，ブランウェルが彼と親交があったことが考えられる。1840年1月から湖水地方に近いブロートン・イン・ファーネスのポスルスウェイト家の家庭教師を務めていたブランウェルは，4月20日にコールリッジに自作の詩とホラチウスの『オード』の翻訳の一部を送り，5月にはアンブルサイド

の自宅に彼を訪問した。ブランウェルはポスルスウェイト家を6月に解雇され，再びハワースに戻ったが，8月末にリーズ・マンチェスター鉄道が開設したばかりのサワビー・ブリッジの駅員に採用された。

＊　＊　＊

書簡の翻訳にあたってはMargaret Smith ed., *The Letters of Charlotte Brontë,* Volume One 1829-1847 (Clarendon Press・Oxford)を使用した。従来用いられてきたワイズとサイミントンによるシェイクスピアヘッド版の書簡が出版されてから半世紀あまりが経過し，新たな書簡の発見や日付けや宛名の間違いも指摘され，新たな編集が待望されていた。クラレンドン版では詳細な注も施され，すでに完了したブロンテ作品集とともに今後のブロンテ研究における定本になることは確実である。ただしブランウェルの書簡は収録されていない。

本稿では書簡の部分は全面的に訳したが，注は必要最低限のものにかぎって要約する形とした。また宛名は特別の記述がないかぎりエレン・ナッシー宛のものである。

［1840年1月12日］

今朝いただいたお手紙は痛ましい内容のものでした。アン・C[1]が亡くなったようです。最後に会ったときは若くて美しい幸せな少女だったのに，今や「人生の熱病」は去り，「安らかな眠りに」就いています[2]。もう二度と彼女に会うことはないのです。それを思うと悲しみを感じます。心の優しい愛らしい娘で，わたしは彼女が好きでした。今ではその姿をこの世のいずこに探してみても見つからないのです。20年前に枯れてしまった花や木の葉と同じように。こうして死別してみると，友達がひとりふたりと去っていき，身辺の人々をすべて失って，一人だけ取り残されて人生行路を終えなければならない人の心の内を，かいま見ることができます。けれども涙を流しても無益というもの。くよくよ嘆くまいと思います。

重ねてご招待は致しませんでした。伯母が冬の間はどんなお客も迎えるべきでないという意見ですので。初めはこんなことは言いたくなかったのですが，けっきょく正直が一番の策と思った次第です。長いこと気になって落ち着かなかったのですが，こうしてはっきり書いてしまったら，ずっと気が楽になりました。

この1ペニー郵便[3]を最大限に活用しようと思います。つまりこのまま家にいても「外に出て」も，時間があるかぎり，できるだけ頻繁にお便りするつもりです。

皆からよろしくとのことです。H夫人[4]のことをお知らせいただいて，きちんとお礼を言わなくてはと，父に言われていたところです。わたしはそれどころか，あなたのはっきりしない書き方と読みづらい筆跡に小言をいわなければと言いました。エレン，お手紙を判読するのに30分かかりました。どうか，すぐにお便りください。ハリレー夫人は毎日わたしの返事を待っているのに，わたしはあなたから便りがなければ返事が出せないのですから。あなたの名前などは伏せておきましょう。ウラー先生にも情報をくださるよう手紙を書いたところです。

さようなら，愛するエレン

シャーロット・ブロンテ

追伸[5]

自分の名前を書かなくてもただ頭文字を示すだけで広告に応えることはできます。人によっては名前を要求する場合もありますが。H夫人のように。家庭教師に耐えられるだけの体力がご自分に

あると思いますか。そのことを考えるのを忘れないでください。

(1)Ann Cook (1825-40) と考えられる。シャーロットがウラー塾の助教師だった頃の生徒で，妹アンとは同級生だった。

(2)『マクベス』第 3 幕第 2 場23行目

(3)1839年 8 月17日に「ペニー料金郵便法」が成立し，翌40年 1 月10日から全国版ペニー郵便制度が施行された。

(4)Mrs. Edward Halliley（旧姓Susanna Hirst）デューズベリの羊毛・カーペット製造工場主John Halliley Juniorは義兄にあたる。シャーロットは夫人が『リーズ・インテリジェンサー』紙（1839年12月21日付け）に掲載した家庭教師の求人広告に返事を出したものと思われる。

(5)T.J.Wise / J.A.Symington, eds., *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence* (The Shakespeare Head Brontë, Oxford, 1932, 以下W＆Sと略記する）では追伸の冒頭に次のような文章がある。「わたしの見るところでは，あなたの決心は正しいと思います。それを実行できるよう願うばかりです。ご自分の能力を疑っているようですが，そんな必要はありません。」

［1840年 1 月24日］

愛するエレン

エドワード・ハリレー夫人にとどめを刺したところです。つまり住み込みになるのをお断りしたというわけです。きっとお腹立ちでしょう。最初にお断わりしたときにも，ひと月だけ試してみては，と勧めて下さったのですから。そんなわけで今はまた，何のあてもなくぶらぶらしています。困ったことですが，そのうちまたなにか来るでしょう。

仕事に出られるという計画ですが，わたしにはお勧めするべきか否かわかりません。問題はあなたの健康だと思います。メアリ・ブルック(1)のように勤め先に恵まれれば，あなたでも充分やりこなせるでしょう。でも近頃の乱暴で手に負えない子供たちの家，たとえばブレイク・ホールのようなお宅では，まず保たないでしょう。アンは二度と戻るつもりはありません。インガム夫人(2)はもの静かで穏やかな方なのですが，子供たちときては，彼らをしつけるなんて命を削るようなものです。

家庭教師として人生を過ごすしかないと思うと，暗澹とした気持ちになります。わたしが思うに，この職業でいちばん必要なことは物事をあるがままに受け入れ，どこにおかれても気楽にくつろげる能力———わが家の人間たちがことごとく欠いている資質なのです。わたしにはシジウィック夫人(3)のような人とはやっていけないことはわかっています。女性がすべて彼女のような人ではないことを願います。わたしのモットーは「ふたたび試みよ」です。

かわいそうにメアリ・テイラーが病気だそうです。最近，彼女に会うか消息を聞きましたか。病気が流行っているようで，こちらでは亡くなる人も少なくありません。プライスさん(4)が亡くなられました。しばらくお加減がすぐれなかったのですが，血管の破裂が命取りになりました。ほんの半年前にお会いしたときには，筋骨隆々として見るからに丈夫そうでしたのに。彼のことはほとんど知りませんでしたし，その消息にとくに関心をもっていたというわけではありませんが，それでも亡くなられたことを突然知らされたときには，正直，驚き，また悲しくも思いました。そう感じたからといって，恥ずかしがる必要はないでしょう。エレン，字が汚くて読みずらかったです。このお世辞のお返しに，わたしの手紙も負けず劣らず関心をもって読んでください。長いお便りをする気分になれませんので，この辺で失礼いたします。神の祝福を。

(1)おそらくMaria Brookeのこと。
(2)Mrs Joshua Ingham　旧姓Mary Cunliffe Lister(1812-99)。なお前出のBlake Hallはインガム家の住居。
(3)Mrs Sidgwick　旧姓Sarah Hannah Greenwood(1803-87)。シャーロットは1839年6月から7月まで同家で家庭教師を務めた。1839年6月8日付けエミリ宛ての手紙を参照。
(4)The Revd. David Pryce(1811-40)は1840年1月17日に死亡した。彼はシャーロットに求婚したことがある。1839年8月4日付けエレン宛ての手紙を参照。

［1840年3月17日］

親愛なるエレナー夫人

40馬力であなたを叱りたい気持ちです。マーサ・テイラーに「全部は言わないで」とお願いしたことを，本人に教えたでしょ。もちろん彼女はそれを知って恐ろしく不機嫌になりました。おまけにあなたとわたしが彼女に知られたくないことを，何かこっそりやっているらしいと勘ぐって，かっかしています。

そういう状況なので，あなたの舌に課してもよかったのですが，どうせ抑えようがないことは明らかですから，禁止命令は解除したいと思います。ゴマソール(1)まで足を運んで，思い出せることは何でもただちにすべて話してあげてください。「美しいエレン」「愛をこめて」「気高い心」などと書いたヴァレンタインのカードのことなどを含めて。ミス・シリア・アミーリア・ウェイトマン(2)の似顔絵や，あのお若い婦人の頻繁なる楽しい訪問についても同様です。ところであの知的で面白い若者に，あなたのことをどう思うか聞いてみましたよ。好意的なものでした。美人で，しかもたいへん良い娘だと思っています。キースリーでの講演(3)の論評が載った新聞は配達されましたか。モーガンさん(4)が来られ，3日ほど滞在されました。ミス・ウェイトマンのおかげで，とてもなごやかにいきました。あの太ったウェールズ人の話を辛抱強く機嫌良く聞いてあげているのには，驚きました。もっともあの長話には閉口した，と後で言っていましたが。

あなたがいないので，わたしたちはとても退屈しています。あの3週間がまた戻ってこないものでしょうか。あなたがお帰りになってから，伯母はときどきとても不機嫌になりました。今は少しましですが。日曜日はひどい風邪をひいて，ほとんど一日中家にいました。アンの風邪は良くなりましたが，まだ体力はじゅうぶんに回復していないようです。ジュー・バスケット(5)用にわたしが絵を送らなかったことで，アンお姉さまはどう言っていましたか。アーンリー(6)に行くことで頭がいっぱいで，このことなどお忘れだとよいのですが。

この辺でペンを置かなければなりません。家中の者がよろしくといっています。ミス・シリア・アミーリア・ウェイトマンもよろしくとのことです。すぐまたお便り下さい。

シバリー(7)

殉教者のような気持ちでわが身をあなたとマーサ・テイラーの手にゆだねます。つまり庭に座って歯を抜こうとしているときに経験するような気持ちということです。あなたは人が言ったことや，したことを報告する独特の方法をお持ちですね。そしてマーサはそれを報告する，さらに変わったやり方をもっています。

(1)テイラー家の住居the Red Houseがそこにあった。
(2)ブロンテ師の二人目の牧師補William Weightman(1814-42)のあだ名。1839年7月末からハワースに赴任していた。1839年7月26日付けエレン宛ての手紙を参照。

(3)ダラム大学で神学だけでなく古典文学も学んだウェイトマンは，キースリーで古典文学について講演を行った。
(4)Revd. William Morgan(1782-1858) ブロンテ師が1809年にシュロップシャーのウェリントンで牧師補であった頃からの知人。
(5)ユダヤ人をキリスト教化する目的で1809年にロンドンに協会が設立され，1815年には婦人による支援グループがリーズに発足し活動を始めた。1839年12月21日付けエレン宛ての手紙を参照。
(6)エレンの兄Henry Nusseyが赴任しているサセックス州チチェスターのEarnley牧師館のこと。アンはヘンリの世話をしていたマーシーと交代することになっていた。
(7)なべかま音楽。台所用品などでやかましい音をたて，人を批判したり嘲笑する。

［1840年４月７日？］

親愛なるメネラウス夫人[1]

こんなにすぐお便りを差し上げるなんて，わたしって本当に良い人でしょう。実のところ，あんまり手紙がくるので押しつけがましく感じやしないか，とても心配です。本当は三月くらい間隔をあければ，そんな不安もまったく消えるでしょうし，年を重ねるうちに遅れる癖も改まるでしょうから。(年寄りみたいに手が震えます，たぶん文字が読めないでしょう，引出しにでもしまっておいて下さい，こんど会ったときに読んであげますから。)あなたがお帰りになった後，ハワースの小さな村は教会の維持税[2]をめぐって大騒ぎです。日曜学校の教室で開かれた集会は大荒れでした。コリンズさん[3]とウェイトマンさんが，議長席のお父さまの両側について護衛しました。猛烈な反対にコリンズさんはアイルランド人の血を煮えたぎらせました。もしお父さまが口でなだめたり力づくで押し止めなかったら，コリンズさんは非国教会の人たちに「煙っぽいキャベツ」[4]を与えた（スコットランドの諺ですが，それについては別の機会に説明します）ことでしょう。コリンズさんもウェイトマンさんもその時はなんとか怒りをこらえていましたが，それは後日，倍の激しさで爆発することになりました。先週の日曜，国教会反対とその末路について説教がふたつ行なわれました。ひとつは午後ウェイトマンさんが，もうひとつはコリンズさんが晩に行ないました。非国教会の人たちは全員が招待されていて，彼らは自分たちのチャペルを閉めて一団となってやってきました。当然，教会の中はすし詰めになりました。ミス・シリア・アミーリアは高教会派の使徒伝承[5]について滔々と弁じたて――説教ではおめず憶せず非国教徒を激しくたたきました。これで彼らも十分お灸がすえられたものと思えましたが，その晩，彼らの喉に流し込まれた苦薬には遠くおよびませんでした。先週の日曜の晩にコリンズさんがハワースの説教壇で行った説教ほど，痛烈で巧妙で恐れを知らない胸に迫る大演説を，わたしはかつて知りません。とくに大げさなことばを使ったわけでも洒落たせりふを言ったわけでもなく，また愚痴ってみせたりお涙ちょうだいをしたわけでもありません。彼はただ立ち上がって，自分の言っていることの正しさを確信し，敵を恐れず結果に不安を抱かない人だけに与えられた勇気をもって話しただけのことです。説教は一時間ほど続きましたが，終った時には残念に思ったほどです。わたしはコリンズさんやウェイトマンさんの意見に全面的に，いな半分も賛成なわけではわけではありません。偏狭で寛容心に欠け，常識的にみてまったく正当化しえないと思います。わたしには良心からしてピュージー主義者[6]やフック[7]の信奉者にはなれません。それどころかもし非国教会派だったら，自分の信じる宗教とその師たちをあそこまで呵責なく攻撃したふたりを，機会がありしだい蹴とばすか鞭をくれるかしていたことでしょう。とはいえ，かくも屈強の敵を前に恐れることなく，堂々と論陣をはった勇敢さには感じ入りました。わたしたちの友ミス・シリア・アミーリアのためにアグネス・ウォールトンの肖像画を描いてあげ

たのですが，それを見た時のあの方ときたら，まるでおもちゃをもらって嬉しくてたまらないこどものように眼を輝かすのです。それをご覧になったら，あなたもお笑いになることでしょう。さようなら。キューピッドが云々なんて，つまらないことはもう言わないでください。それが根拠のないたわ言であるのは，わたしと同じように，あなたにもよくおわかりのはずです。

C・ブロンテ

ウェイトマンさんはキースリー機械工協会[8]でもうひとつ説教をなさり，お父さまも説教をなさいました。ふたりのことは新聞に大きく取り上げられましたが，そこには「沼地と山に埋もれ，ごく最近まで半ば野蛮人の国と思われていた」ハワースの村から，これほどの知性が発揮されるのは驚異的であると書かれていました。

(1)Mrs Menelaus　ヘレネー（スパルタ王メネラウスの妻，トロイのパリス王子が彼女を奪い去ったことからトロイ戦争が起こった。）Helen とEllenの発音が似ていることからか。
(2)教会維持のために徴収されていた税金で，何の恩恵も受けていない非国教会の人々は各地で納税に反対していた。この手紙における話し合いが開かれたのは1840年3月26日で，その模様はThe Bradford Observer (2 April, 1840) で報じられた。
(3)Revd. John Collins　アイルランドのアントリム出身。
(4)「とっちめる」「ぎゅうという目にあわせる」の意。
(5)カトリック教会や英国国教会が，その権威を使徒(Apostles)から継承されているとする主張。
(6)Edward Bouverie Pusey (1800-82)　神学者でオックスフォード運動指導者。
(7)Walter Farquhar Hook (1798-1875)　1839年からヴィクトリア女王のチャプレンを務めた。38年に'Hear the Church'と題した説教で使徒継承を主張した。
(8)1825年に設立されると同時にブロンテ師は入会し，1833年4月8日に脱会した。

［1840年4月30日］

愛するエレン

この贈り物に感謝していないわけでも，贈り主のことを忘れたわけでもありません。お便りする前にバッグを仕上げ，とても可愛らしいトルコ風の贈り物への礼状と一緒に送りたいと思っていたのです。でもキースリーでは紐もふさ飾りも手に入りませんし，どこかへ出かける機会もないので，もうしばらく手元に置いておくしかないようです。

お便り，とても興味深く読みました。アン[1]の性格が顕われています。困ったことをしてくれました。もしミス・フォレット[2]が傷つきやすい人で，彼女がほんとうに心を寄せていたとしたら，耐えなければならない失望は彼女を打ち砕き，事を完全に終わりにしてしまうに十分だったでしょう。正直，今のところまだ結婚に反対するだけのしっかりした理由は見あたりません。お姉さまが彼女のことを厚かましいと言っていることについては，わたしは割り引いて考えなければならないと思います。そうした非難は初めから偏見をもった人間が言っていることなのですから。

お便りの雰囲気全体の中には他に，あなたが何人かのお友達のようでないことを感謝したくなるようなものがあります。服装，財産，社会的地位がお姉さまには人物を評価する上で唯一の基準になっているように思えます。あなたのお姉さまは世間など捨てたとお考えのようですが，その世間のもっとも愚かしい見方のいくつかが，まるで疫病のように彼女にとり憑いているのです。エレン，あなたはそうした考えを避け，「しっかり真実を見極めて」いることでしょう。アンはほんらい聡明

な女性だったのですが，その判断力が歪められてしまったのです。人を見る眼をすっかりなくし，いぜんはたぶん暖かであった心も弱まり曇ってしまいました。それもすべて無慈悲な野心———成り上がりたいという気持ち———彼女の眼にはその意見や富や服装が大きな価値を与えていると見える人々に認められたいという気持ち———のなせるわざなのです。

ヴィンセントさん(3)という方についての部分は，わたしにはまったく理解できません。説明らしいことは一言も書いてくださらないのですから。これについてはただちにお知らせ下さい。立派な方ならば，素敵なことになればよいと思っています。恥ずかしがることはありません。でも適切な人でなければいけませんよ。そうでなければ彼があなたを手にいれることを，わたしが許しません。ブルックロイドでは，足腰も立たなくなるほど働かされているのではないでしょうか。ヘンリが言うように，身体に気をつけ，あまり心配しすぎないで。編み棒入れの箱を伯母がとても喜びました。

C・ブロンテ

(1)エレンの姉Annのこと。兄ヘンリの世話にアーンリーに行っている。1840年3月17日付けエレン宛の手紙を参照。
(2)エレンによって名前が削られている。W&SではHalkettとなっているが，Follettとも読める。
(3)Revd. Osman Parke Vincent(?1813-85)　ヘンリ・ナッシーの学生時代からの友人。

［1840年5月15日］

愛するエレン

先日のお便り，とても興味深く読みました。人の行動を正しいと思ったとき，それを伝えるのがよいとは限りませんが，それでもとても愉快なことです。仮にあなたが間違った行動をとっていたとしても，それをはっきりと言えるだけの誠実さがわたしにあるよう願いたいものです。ですから正しい行動をなさった今，わたしは自分が思ったことを好きなだけ言いたいのです。

あなたが聴罪の司祭さまなら，わたしはあなたには思いもつかない欠点を晒けだしていることでしょう。つまらないお世辞を本気にしているなどと思われたら困りますが，ほめ言葉につい嬉しくなって，それを隠すのに一苦労するということもあります。かと思えば，無視あるいは非難とも取れるような性急な言葉による疼くような痛みに，まんじりともしない夜もあります。

どんなに説得されても尊敬できない———愛せないとまではいいませんが———お方とは結婚してはいけません。結婚する前に尊敬できるような人ならば，少なくとも穏やかな愛情が生まれてくるでしょうから(1)。情熱は決して望ましいものとはいえないと思います。第1にそれはめったに，いえ決して報いられないものだからです。第2にたとえ報いられたとしても，そんな感情などほんの一時的なものに過ぎません。新婚のあいだくらいは保つでしょうか。そして次にはおそらくそれは嫌悪，もっと悪いことには無関心に取って代わられるでしょう。なるほどそれは男性の場合だけかも知れません。では女性はといえば———自分の方から一方的に愛するしかないとしたら，神よ，救い給え。

［わたしたちの手紙は妙な調子になってきました。愛と結婚のことばかり書いていますが，？ほんとうに，あなたはあまり年を取らないうちに結婚するだろうという予感があります。このほめ言葉に感謝していただかなくて結構です。なぜって］わたしはまったく結婚しないだろうと，かなり確信しています。理性がそのように告げていますし，わたしは感情の奴隷というわけではないので，ときおり理性の声に耳傾けることができるのです。

C.ブロンテ

(1)ところがシャーロット自身は，およそ1年前にエレンの兄ヘンリ・ナッシーの求婚に対して「強い感情」と「敬愛」を感じられないとして断っている。1839年3月12日付けエレン宛ての手紙を参照。

1840年5月26日[1]

拝啓

今朝，書類を整理していたところ，先月付けのお手紙を頂いていたのに，お返事を差し上げていないことに気づきました。返事が遅いことでは妹さんのエレンにたびたび叱られていますが，これでは当たり前というものです。

けれどあなたはもっとひどい失敗もお許しくださる思いやりの持ち主と信じています。とくに急いでその償いをしようというのなら。

実はお便りを頂いたときにはエレンが滞在中で，話に夢中で他の人にお便りすることなど思いうかびませんでした。これはご挨拶なと思われるでしょうが，軽んじているというわけではありません。エレンがどんなに大切な人か，そしてわたしたちがどんなにたまにしか会えないか，ご存知でしょう。またわたしが彼女のことをどう思っているかも，少しはお分かりいただけると思います。こうした前提から，いったん彼女に会えたなら，その時間は一瞬たりともむだにできないことは，容易にご推察いただけるでしょう。

ヴィンセントさんという方について少し聞きました。お友達だと思いますが，彼が善良で聡明な方であることを祈ります。そうでなかったら，彼に用意されている賞品を受けるに値しない，と言わせていただくことになるでしょう。ぶしつけな言い方ですが，お許しいただかなければなりません。女性は男性よりもたがいの真値を認めあうことができます。男性は順風に輝く外見の美しさだけに目を奪われがちですが，女性はもっと時間をかけてじっくり観察し，逆境にあってこそその価値を発揮する性格を評価することを学ぶのです。

それにあの穏やかな気質と落ち着きは，家庭の炉端をいつも明るく平和なものにしてくれることでしょう。それは1日に20回も気分が変わるような熱烈な人よりも好ましいものなのです。これまでエレンを見てきて，わたしは彼女が必ずや良い妻になる———良い夫と巡り会えればの話ですが———ものと思います。たとえ愚か者あるいは暴君と結婚することになっても，彼女にはその傲慢さあるいは愚鈍さに黙って耐える勇気はあるものと思います。そんな中でも，エレンはきっと理性的に災いを福に転じてくれることでしょう。

わたしの手紙はどれも説教じみているとお思いでしょう。そこには何も新しいものはありません。あなたがくり返しお聞きになりたいほど興味ある話題は，何も知りませんので。まだ実家にいて，心身ともに好調です。ただ勤め先がはっきりしないことだけが不安です。

いつでもお便り下さればありがたいです。次回は必ず遅れないようお返事することを，お約束いたします。幸福を手に入れる見込みは，着々と進んでいるものと思います。将来の伴侶[2]についてのお話から，その方はあなたが現世の苦難を明るく乗り越え，来世において永遠の安息を得るうえでお力になれる方と信じています。少なくともそのような方でありますよう祈っています。事を慎重に運ぼうとするのは当然です。今まさに踏み出そうとしているその一歩に，あなたの一生の幸福がかかっているのですから。

ある決まった題目について，例の文学的な調子で書いて欲しい，などとおっしゃらないでください。とうていできかねます。わたしのことをブルー・ストッキングか何かのように思っていらっし

ゃるのですね。そんな風にお考えのあなたをからかってみたい気もしますが，たぶん気を悪くなさるでしょう。題は何でしたか。化学，天文学，力学，貝類学，昆虫学，それとも他の何学でしたかしら。いずれにしても，わたしはまったく無知無学でございます。科学者でもなければ言語学者でもありません。わたしのことをずいぶん買いかぶっていらっしゃるのですね。なにも知らないと申し上げたら，唖然となさるのではないでしょうか。でもせっかくのご好評にしばらく身をゆだねたいと思いますので，口をつぐんでいることに致しましょう。

かしこ

C.ブロンテ

(1)ヘンリ・ナッシー宛て

(2)この時点ではMiss Follettのこと。1840年 4 月30日付けのエレン宛の手紙を参照。

1840年 5 月29日[1]

愛するエレン

取り急ぎお返事いたします。来週はメアリとマーサ・テイラーをハワースにお招きしているので，とてもお伺いできません。ご招待いただいてほんとうに感謝しています。いつかお受けできると良い思います。急に思い立ってジグを寄こすなどという性急なことはなさいませんように。そんなことをしたら，空で帰ることになりますよ。わたしを迎えに寄こすなんてことは，もうけっして言わないでください。行くときには自分で行きます。もう時間がありません。皆がよろしくと言っています。

マーシーによろしく。また彼女に会えたら嬉しいです。仕事が見つかる当てはまるでありません。月に行くのと同じくらい当てのない話です。広告に返事を出してみましたが，むだでした。

さようなら。できるだけ早くお便りください。

C.ブロンテ

(1)この手紙はW&Sでは1840年 3 月15日付けの手紙の追伸として，その一部が収録されている。

[1840年 6 月 2 日？]

愛するエレン

メアリ・テイラーはまだハワースに来ていません。まずわたしが先に出かけ数日滞在するという条件で，こちらに来ることになっているのです。順調にいけば来週の水曜日に出かける予定です。ゴマソールには来週の金曜日か土曜日くらいまで滞在するつもりです。したがってもしあなたがよければ，その次の週のはじめをあなたと過ごしたいと思います。よければなんて，言うも愚かですね。あなたに会えたら嬉しいし，あなたもそうでしょう。これではたいして時間はありませんが，いろいろ考えると，これが唯一現実的なところかと思います。エレン，どうか 2，3 日以上滞在するようにせがまないでちょうだい。お断りせざるをえないでしょうから。キースリーまでは歩いていくつもりです。そこから馬車でブラッドフォードまで行き，それから誰か雇って荷物を運ばせ，ゴマソールまでの残りの道は歩くつもりです[1]。これがうまくいけば――――ブラッドフォードには 5 時頃までに着き，夕方涼しくなってから歩けるでしょう。メアリ・テイラーには計画全体を知らせてあります。ふたりに会いたくてたまりません。

さようなら
CB
［もし］もっとよい提案があれば，そしてそれが現実的なものなら説得に応じます。

(1)ハワースからキースリーまでは約3.5マイル，さらにブラッドフォードからゴマソールまでは約5.5マイルある。

［1840年6月末］

愛するエレン

これといってお伝えすることもなければ時間もあまりないのですが，お約束どおりお便りいたします。

メアリ・テイラーの来訪[1]は，わたしたちばかりでなく彼女にも大いに楽しいものになったと思います。彼女はウェイトマンさんと何度もチェスをして，いつも最後は怒ったふりをして終わりになります。ウェイトマンさんは回復していますが，どうか彼のことなどお気遣いなく。あの方は移り気な方で———とくにあなたに対してというわけではなくて，気のある女性が他にも5，6人はいるのです。先日スウォンジーの恋人と別れ，彼女からの手紙をすべて送り返していました。目下のところ意中の女性はキャロライン・デューリー[2]で，彼女に宛て恐ろしく情熱的な詩を書き送っていました。あんなに落ち着かないのは多血質のせいなのでしょう，お気の毒に。

スウォンジーの一件については，あまり詳しくは聞いていませんが，それでもわたしにわかる限りでは，つれない仕打ちだったように思います。彼は相変わらずため息ばかりついています。まだあなたのことは名前も伝えていません。彼の本心を知る機会があるまでは伏せておくつもりです。ひょっとしたらまったく教えない，それどころかわざと名前を出さないようにするかもしれません。どうなるかは，彼の性格をわたしがどう判断するかによります。あなたにあれほどはっきりと関心を示しておきながら，その間もスウォンジーの女性と定期的に手紙のやりとりをしていたことを知って，良い気持ちはしませんでした。そして今，突然その彼女と別れるといったやり方，そして明らかに移り気なようすなど，好ましいものとはいえません。これからひと月ほどは，彼を観察する機会はあまりないでしょう。2週間くらいは聖職位の取得試験の準備に追われ，それが済むとアップルビーとクラッケンソープでウォールトンさん父娘とお過ごしになるはずです[3]。どうか彼のことなど考えないで———あなたが失恋するのを心配しているわけではありませんが———それでも彼のことなど想ってはいけません。マーシーとお母さまによろしく。

かしこ
サイラ[4]

(1)シャーロットはゴマソール（メアリ・テイラーの住居）とバーストール（エレン・ナッシーの住居）に6月10日から16，17日まで滞在したので，メアリの滞在はその後のことと考えられる。

(2)Caroline Dury　1820年生まれ。キースリーの主任司祭Revd. Theodore Dury (1788-1850) の娘。

(3)Applebyはウェストモーランドに流れるエデン川のほとりの美しい市。ウェイトマンの出身地。Crackenthorpeは3マイルほど奥まった所にある小村で，Agnes Waltonの住まいがあった。

(4)Ca.ira　'it will be all right'の意。1789年秋からフランスで流行した革命歌で，この部分が折り返しに使われている。

［1840年 7 月14日］

愛するエレン

同封の手紙をマーサ・テイラーに渡していただけないでしょうか。そのためにわざわざゴマソールまでお出かけになるには及びません。また郵送は絶対しないで下さい。教会で見かけたらご自分で手渡して欲しいのです。マーサへの手紙をあなたへのお便りのなかに忍ばせるなんて，奇妙に感じられるでしょう。もちろん理由があってのことなのですが，わたし自身のことではないのでお話しするわけにはいきません。マーサは感謝することでしょう。この秘密めかしたやり方に，何か重大な事態が生じているなどと思わないで下さい。まったく取るに足らないことなのですから。でもそんなつまらないことが，ときに重要な意味をもつようになったりするものなのです。

あなたが変わらず純真なことをとても嬉しく思います。ふたりのたわいない冗談を，あなたが真に受けるのではないか少し心配です。ウェイトマンさんが今朝ハワースを発ちました。数週間はお帰りにならないだろうと思います。エレン，あの方は相当な浮気者であると思います。前にもまして切なげに溜息をついたり，せかせかと歩き回っています。あちこちに顔を出していたことがわかりました。キースリーでは多くの女性たちを征服しました。セアラ・サグデン(1)もキャロライン・デューリーも彼に夢中です。もっともキャロラインは町を去り，ウェイトマンさんはまだ彼女の面影を追い続けています。彼は自分が魅力的なのを知っていて，ひどくうぬぼれているのです。別に驚きはしません。当たり前でしょう。ハンサムで頭も良いし楽しくて人好きのする青年なのですから。彼に参ってしまう女性は後を絶たないでしょう。あなたがその一人でない限り，わたしにはどうでもよいことです。彼はあなたのことを口にしませんでしたし，わたしの方からも特に言いませんでした。このことについては，わたしたちはお互いに十分了解していると思います。このところ彼とはほとんど顔をあわせることがなく，ろくに言葉も交わしていません。一人で寂しそうに沈んでいるときなどは励ましたり慰めたりしたこともありましたが，元気になり友人もたくさんいる今となっては，わたしも気にしませんし，向こうもおなじです。

彼はみごとに試験に受かるでしょう(2)。頭の良い方ですから。

(1)Sarah Sugden(c. 1814-76)　おそらくキースリーの工場主で治安判事を務めたことのあるWilliam Sugdenの娘
(2)ウェイトマンは7月18日にリポンのロングレイ主教によって聖職位を授与された。

［1840年 8 月14日？］

短い手紙しかくださらないので，わたしも短い手紙を送ります。仕返しという意味ではなく，あなたと同様，わたしもあまりお知らせすることがないからです。わが家での最新のニュースはおよそ 2 週間ほど前に，南イングランドの親戚が訪ねてきたことです。ジョン・ブランウェル・ウィリアムズと奥さんと娘さん(1)が，クロスストーンのフェネル大叔父さん(2)の家に 1 カ月あまり滞在しました。じつに偉ぶっていて，話好きというか，出しゃばりです。あまり感心しません。わたしの眼には，かれらがここヨークシャーで大物の振りをしようとしているみたいに見えます。ウィリアムズさん自身は女性たちほどひどくはありません。率直で知的な感じで，背が高くて頭の切れそうな生き生きした感じの人でした。わたしを見るなり，シャーロット伯母さん(3)にそっくりだと驚いていました。奥さんは才気煥発で教養あふれる婦人を装っていますが，口ほどにもないというのがわたしの思ったところです。従妹のエライザは美しい顔立ちの元気いっぱいの少女になるよう生まれつ

いたような娘です。わざとらしく思い悩んだようなふりをすることを身につけています。彼女とは仲良くできたでしょうけど，お話しできたのはただ低教会派の福音主義の牧師だとか，至福千年説，バプティスト派のノエル[4]や，植物学，そして彼女自身の改宗のことだけでした。誤った教育が少女をまったくだめにしてしまったのです。たぶん無精なところはあるかも知れませんが，生まれもっての性格のよいことは，その顔立ちが示しています。物腰は信心ぶっているアミーリア・ウォーカーのような感じです。あのばら色の丸顔と背の高いはちきれそうな身体にはまったく似合わないのに，時おり天使のような子供の無邪気さを装うので，見ていると吹き出しそうになりました。次回は長いお手紙をください。そうすればわたしも差し上げます。さようなら。

(1)John Branwell Williams　シャーロットたちの母の従兄弟。
(2)Uncle Fennell (1762-1842)　母の叔父で，シャーロットには大叔父にあたる。トッドモルデン近隣のクロスストーンの牧師となった。Jane Branwellと結婚した。
(3)Charlotte Branwell (1791-1848)　母の末の妹。従兄弟のJoseph Branwell (1789-1857) と結婚した。
(4)Baptist Wriothesley Noel (1798-1873)　英国国教会の聖職位を得たが，1848年にバプティスト派に入り伝道家として知られるようになった。

［1840年８月20日］

親愛なるミセス・エレン

とびきり長いお便り，とても嬉しかったです。あの手紙の開封に勝る滑稽な場面は，ちょっと思いつきません(あひるとウェイトマンさんの一件を含めても)。ところでウェイトマンさんといえば，試験のため６週間前にリポンに出かけたことはお伝えしたと思います。いまだお帰りでなく，いったいどうなったのかわたしたちにはとんとわかりません。いらしてからブランウェル宛に手紙が一通届きましたが，そこには舞踏会でアグネス・ウォールトンを見初めた様子が微にいり細にいり描かれ，頭のてっぺんから爪先まですっかり彼女に首ったけなどとありました。思うにあの方は二度と戻らないつもりでハワースを後にしたのではないかしら。戻ってくるとすれば，仕事が見つからなかったのでということぐらいでしょう。ハワースはあの方には向きません。彼にはもっといろいろな人達と出会える場所が必要なのです。こればかりはどうしようもありません。人に好かれやすい反面，そのためかえって飽きやすいというわけです。彼は聖職者にはなるべきでなかったのです。ほんとうにそうなのです。

この前のお手紙の内容をブランウェルに話しました。彼につけてくださった「タストリル」[1]という呼び名を，彼はなんにもいわずに笑っていました。ジョン・ブラッドベリ[2]が結婚したからといって，あなたが失恋しなくてよかったと思います。でもあんなにお熱だったのに，ちょっと意外な気がします。彼って，とてもハンサムですてきな好感のもてる方でしたから。

あなたの言うわたしたちの八月の親戚たちは，ロンドンに帰りました。わたしたちの所へは日帰りで泊まらず，もっぱらフェネル大叔父さまの家に滞在していました。大叔父さまは彼らが帰ったので，ほっとしているのではないかと思います。ジョージ[3]が早く良くなられるとよいのですが。スコットランドまでヘルドさん[4]が付き添っていらっしゃったのですか。ヘルドさんがブルックロイドにお泊まりになったのでしょうか。最近ウラー先生方にお会いになりましたか。どなたかわたしに務め先を紹介していただけたらありがたいのですが。広告にもたくさん応募してみましたが，どれ

ひとつとしてうまくいきませんでした。

ゴマソールからまたフランス語の本がどっさりと———40冊はあるでしょうか———届き，半分くらい読んだところです。他のと同様，軽妙で不埒で洒脱な，そして不道徳なものばかりです。最大の特典はそれらの本からフランスやパリのことがよくわかること，さらにフランス語会話の練習になることです。

他には何もお知らせするようなことはありません。気が乗らないのです。あなたの手紙の長さにはとうてい及ばないことをお許しください。さようなら，ミセス・エレン。あなたが郵便やさんを恨めし気に見送ることがないようにと，すぐに返事を書きました。珍しい筆跡の例として，この手紙をとっておいてください———すばらしいでしょう———黒ぐろとした染みといい，読めない文字といい。

キャリバン[5]

(1)'testril'（「6ペンス」の意）のもじりか。エレンがブロンテ家に滞在した際の言葉遊びの続きと思われる。
(2)John Bradbury　ブラッドベリ家の親戚と思われる。同家はテイラー家およびナッシー家の親戚。
(3)George Nussey (1814-85)　エレンの兄。精神病を病んでいた。
(4)Heald バーストールの牧師。ナッシー家の遠縁にあたる。
(5)シェイクスピア『テンペスト』に登場する半獣人。

［1840年 9 月29日？］

「霊風は思うままに吹き，あなたはその声を聞くが，それがどこから来てどこへ行くかはわからない。[1]」たしか聖書の一節と記憶しているが，いずれの書のいずれの章か，はたまた引用の文句が正確か否かはわからない。とはいえ我が輩は，かつて「人生の朝ぼらけ，いまだ若かりし頃に[2]」知遇を得たエレン・ナッシーという若き婦人に便りをしたためねばならない。この婦人，しばし以前に手紙をくれたとのことであったが，さして書き送るべき用件もないままに一日延ばしにしておったが，ついに「その神の名をもって呪う[3]」恐れありて，ともかく数行ばかり書き連ねんと机に向かう。それを手紙と呼ぶか否かはご随意に。さてかの婦人がこの産物に何らかの意味を期待していようものなら，惨めな失望を味わうことになろう。我が輩が供するのはごたまぜ料理。細切れ肉をシチューに煮込んで，フランス風オムレツを添えて，ご機嫌伺いの言葉と共に送りつける所存。当地ユダヤの丘で吹きすさぶ風も，ペリシテ人の住むバトレー教区の平地ではそよとも吹かぬと思われるが[4]，我が知恵袋に与えた効果はてきめん。あたかもウィスキーが2本足の動物どもをふらつかせるに似たり。万物がばら色に見え，なろうことならジグを踊りだしたい心地がする。風に当たりやすいという点では，豚か驢馬の性質が我が輩のなかには紛れ込んでいるに違いない。風がいずこから吹いてくるかは，我が輩にはわからぬ。一生わからぬであろうが，それでもブリドリントン湾の巨大な仕込み樽の仕掛けがいかなるものか[5]，今どのような種類のイースト菌が波の上を漂っているか，大いに知りたいものである。

ブルック夫人[6]なる女性が教師を探し求めているらしい。我が輩を雇わぬものかと思い，［ペグ・ウラーと呼ばれるいま一人の婦人に］それを伝えてほしい旨を手紙を書いた。自宅にいて風の吹くまま気の向くままに日を送るのは，まことに安楽なことである。されどイソップなるご老体の蟻ときりぎりすの寓話を思いだした。つまり夏の盛りを歌って過ごしたきりぎりすが，冬中，腹をすか

しているという話だ。

我が遠縁にあたるパトリック・ボアネルゲなる者[7]が，リーズ・マンチェスター鉄道[8]の職員として栄達を求めて，荒野の放浪と冒険とロマンの武者修行に乗り出した。リーズとマンチェスターはいずくにありや。タドモアすなわちパルミラのごとき荒野の都ではあるまいか[9]。エレン夫人がウィリアム・ウェイトマンの消息を知りたくてうずうずしているのは先刻承知。[夫人は秘かに思いを寄せ，その面影を忘れられずにいるのだ。] だが我が輩は一言もいわずに，夫人を苦しめてやろう。実を申せば，めったに会わないのでほとんど言うべきこともないのだ。たまの日曜に見かけると，相変わらずの好男子ぶりで，陽気でご機嫌うるわしい。実はウェストモーランドから帰った彼とじっくり語り合う機会があったのだが，その際，彼はアグネス・ウォールトンに寄せる熱い想いを披露したという次第。さて彼女に恋しているものやら，我が輩には分かりかねるが，どうもそれらしく聞こえたとは申せましょう。彼は留守中，わたしたちに大量の獲物を送ってくれました。鴨，雷鳥，山うずら，さぎ，だいしゃく鴨，さらにはおおぶりの鮭にいたるまで。最近，彼の思いがけない一面を知って，彼の長所の一端をかいま見ることになりました。先週の土曜日の晩のこと，彼は1時間ほど居間にいて，帰ろうとしたとき父が声をかけました。「どうかしたのかね。今夜は元気がないようだが」「そうでしょうか。気の毒な娘に会ってきたのですが，どうやら今日，明日の命なのです」「そうか，名前はなんというのかね」「ジョン・ブランドの娘スーザンです」スーザンというのは，わたしの日曜学校でいちばん古くていちばん出来る生徒なのです。これを聞いてわたしは出来るだけ早く会いに行かなくてはと思いました。月曜の午後に訪ねてみると，病は重く衰弱が激しくて，いかなる旅人も行きて帰らぬ遙かなる境界[10]に向かっているようでした。しばらく枕元に付き添ってから，わたしは思いついてポルト酒がよいのではと母親にたずねました。彼女は医者にも勧められたと答え，さらに先日ウェイトマンさんが来られたときにワインとジャムを届けてくださったというのです。さらに常日頃から彼が貧しい人たちに優しくしてくださると言い，たいへん感謝しているようでした。彼には確かに欠点もありますが，良い面もあるのです。神の祝福を！彼ほど恵まれた人間が完全無欠でいられるものでしょうか。彼の過ちや弱点をたくさん知っていますが，わたしはかばいこそすれ責めようとは思いません。なるほどわたしは決めつけすぎるのかも知れません。でもそれが何でしょう。人はその能力に応じて正しいと思うことをするしかありません。こんなことからわたしとウェイトマンさんが仲良くやっているなどとは思ってはいけません。全然なのです。互いによそよそしく冷ややかで打ち解けません。めったに言葉を交わしませんし，話したにしてもごく当たり障りのない話題です。いまわたしの性格についてウェイトマンさんにお聞きになったら，きっと初めのうちは朗らかで話し好きな人だと思ったけれど，そのうちに気分の変わりやすい難しい人だとわかったとお答えになるでしょう。わたしの態度は相手しだいで，相手が立派ならこちらも楽しくおしゃべりするし，あまりになれなれしいと冷たくしなければという気持ちになる，それは無理にそうしているのでわたしには苦痛なのだということを，彼はわかっていないのです。冷たくしているのは便利なので，今後もこれで行こうと思います。

(1)ヨハネ福音書第3章第8節

(2)Thomas Campbell, 'The Soldier's Dream'第4連より。引用は正確には次の通り。'I Flew to the pleasant fields traversed so oft/ In Life's morning march, when my bosom was young.'

(3)サミュエル前書第17章第43節

(4)ハワースの丘陵地帯をエレンの住む平坦な教区と比較している。バーストールとバトレーは隣接する教区。

(5)Bridlington　1839年10月，シャーロットはエレンとヨークシャー東海岸を旅行した。
(6)Mrs Thomas Brookeと思われる。ハダーズフィールド近在のノースゲイト・ハウスに居住。
(7)ブランウェルのこと。Brontëはギリシャ語で「雷」の意。マルコによる福音書ではイエスがヤコブとヨハネに「ボアネルゲ，すなわちいかづちの子」という名を付ける。(第 3 章第17節) ブランウェルの激しやすい性格を皮肉ったもの。彼はこの年の 6 月に，ポスルスウェイト家の家庭教師を解雇されていた。
(8)ブランウェルはサワビー・ブリッジ駅の駅員に採用され，1841年 4 月にはそこから 2 マイルほど北西にあるラデンデンフット駅の駅長に昇格した。
(9)タドモアはソロモン王が荒野に立てた都市だが廃虚になった。272年にローマ人が占拠したとき，その女王ゼノビアを連れ去った。
(10)『ハムレット』第 3 幕第 1 場，79—80行

[1840年11月12日]

愛するエレン

いたずら書きの残ったこの便せんをお許しください。折悪しく便せんが切れてしまい，手元にはこれしかないのです。楽しそうな似顔絵の一つは消してしまいましたが，残りは消さずにおきました。それらがわたしの手になるものではなく，かのウェイトマン牧師の神々しい指から描き出されたものであることを思い出し，温情的な取りはからいにおよんだというわけです。馬の目の位置が少し高すぎることにお気づきでしょう。その点を除けば，まずまずの出来といえるでしょう。なかなかの審美眼といえます。お手本をまねたのではありません。ある日の晩，たまたまこちらに来られたときに，これをはじめいくつか小物をスケッチしたのです。後になって自分の作品を眺めたときの得意そうな顔をお見せしたかったです。作品のひとつには彼の名前が名声の神によって，上空の雲に書き込まれる姿を描いていました。

ブルック夫人とは手紙でやりとりしました。わたしの応募の仕方に，つまりその率直なことに感銘を受けた（もし華やかで優雅で気の利いた人をお探しなら，わたしは適材ではないことをあえてお伝えしたのです）とのことでしたが，求めていたのは器楽と声楽の指導ができる人ということでした。わたしにはそれらはできませんので，当然ながらお話はそれっきりになりました。でもいったん立ち上がったからには，席を見つけるまでは座るつもりはありません。とはいえ未完に終わった事業についていつまで話していてもむだですから，この件はこれまでにしましょう。実務的に対処しようとするわたしの覚悟をこの文章からくみ取ってください。ミス・エライザ・ウラー(1)の学校は健康に適した所とはいえません。生徒を集めるお力になれればと思っているのですが，ブラッドフォードでヒープ夫人(2)が新しい学校を開くということもあってか，うまくいきません。

コ[リンズ]夫妻のことは覚えているかしら(3)。先日，奥さまが来られてご主人のことをこぼしていました。飲む，うつ，買うといったありさまで，およそ嘆かわしい話でした。父にどうしたらよいかというのです。自分たちの前にあるのは破滅ばかりだというのです。とても返済できそうにない借金を抱えているのです。奥さまはご主人がすぐにも副牧師を解雇されるものと覚悟しています。これまでの苦い経験から，ご主人の行状がとうてい許されるものでないことはおわかりなのです。家族に対してもひどい仕打ちをなさるとのことです。父は彼女にきっぱりと別れ，できるなら実家へ戻るようにと助言しました。前からずっとそのつもりでしたと夫人は答え，B氏(4)から解雇されしだい出ていくそうです。ご主人のことをひどく憎んでいて悪しざまに言われ，気遣うようなそぶりはみじんも見せませんでした。べつに驚きはしませんが，それでも不思議に思うのは，今と同じよ

うにずっと憎み続けてきたに違いないその相手と，そもそもどうして結婚などしたのかということです。きちんとした女性なら，こんな男性にはぜったい嫌悪しか感じられないはずなのです。彼のことを知る前から，その多才ぶりに驚かされたときに，なんとなくわたしはそんな感じをもったのです。口をきくのはおろか，顔を見るのもいやな気がしたのです。もっともそこまで嫌ってよいだけの理由がきちんとあるわけでなく，直感だけで言うのもばかげているように思いましたので，できるかぎりそんな感情は抑えました。そして事毎にできるだけの礼は尽くしたつもりです。メアリが彼をひとめ見ただけで，わたしと似たような印象を持ったのには驚きました。彼にいとまを告げるなり言ったのです。「シャーロット，あの人，なんて嫌な感じなの！」「まったくだわ」とわたしも言いました。アイルランドでどのようにして知りあったのか詳しくは知りませんが，夫人は彼もそこまでは追っては来られないはずだと言っています。

こんな話題のせいで，ひどく不愉快なお便りになってしまいました。恨めしく思っていることでしょうね。でも次回は（すべてがうまく行けば）もっとましなお便りを差し上げますから。

C.ブロンテ

(1)Miss Eliza Wooler　1838年12月から姉に代わって妹のエライザがデューズベリ・ムアのヘルズ・ハウスに移った学校を運営していた。

(2)Mrs Hannah Heap(?1802-77)　ブラッドフォードの副牧師Rev. Henry Heap(?1789-1839)の未亡人。夫人と未婚の娘H.M.E.Heapがブラッドフォードに学校を開設した。

(3)Revd. John Collinsのことと思われる。

(4)Revd. William Busfield(1802-78)　キースリーの教区牧師。1840年7月2日からRevd. Theodore Duryの後任として赴任。

[1840年11月20日]

愛するネル

前回のお便りはとても大事な問題を扱っていましたので，日を置かずにお返事します。ネル，わたしはこれからあなたにお説教し助言するつもりですが，あなたはそれをおばあさまの言葉だと思って聞かなければなりません。でも初めに———あなたに言う前に———ヴィンセント氏のお耳に入れたいことがございます。きっと彼の耳に届いてほしいものです。

聖クリュソストモス，聖シモン，聖ユダの御名[1]にかけて，あの立派な青年がなぜ男らしく進み出て言うべきことをあなたに直接おっしゃらないのでしょうか。まわりの方々の手を煩わせたりせずに。ヴィンセントさん，晴れ渡った朝にでも，ブルックロイドまでご自分の足で，あるいは馬でお出かけなさい———ミス・エレンは居間でジュー・ボックスのために子供用の白い上っ張りを縫っていることでしょう———そしておっしゃるのです。「ミス・エレン，お話があるのですが。」もちろんミス・エレンは優しく「はい，ヴィンセントさん」と応じてくれるでしょう。お二人だけになったら，彼女の隣の椅子に腰掛けて，つまらないジュー・ボックスなどわきにやって，わたしの言葉に耳をおかし下さい，と言うのです。そしてはっきりと誠意をもって，しかし決然と始めるのです。「ミス・エレン，ひとつ大事な質問をしたいのですが。いかなる運命になろうとも，わたしを夫として受け入れてくださいますか。わたしは資産家とはいえませんが，ふたりの日々の暮らしには事欠かないだけのものはあります。地位はそれほどではありませんが，あなたを嘘偽りなく心の底

から愛しています。ミス・エレン，あなたが世間というものをよくごらんになれば，わたしの申し込みが身分不相応のものでないことはおわかりになるはずです。あなたに心から想いをよせ，またいささかの財産もございます。」ヴィンセントさん，ぜひともそうなさい。そうすれば必ず願いは叶います。恋わずらいの感傷的な手紙をお兄さんのヘンリに送り続けるなら，わたしはあなたの求婚を少しも評価できません。

ヴィンセントさんのことはそれまでとして，さてネルや，今度はおまえが苦い丸薬———友人の助言と呼ばれる———を飲む番ですよ。そこで困ったことは，わたしがヴィンセントさんを知らないということなのです。知っていればわたしの意見はたったの二言で済みます。その方は少々頭が弱いのではありませんか。ならず者か，大嘘つき，偽善者か，間抜けといったところでしょう。もしそうなら，かかわり合うだけばからしいというものです。さっさと手を切りなさい。ただちにきっぱりと希望をくじいてやったらいいのです。

それとも少しはましなのでしょうか。少なくとも常識的で———温厚で気むずかしい人でなければ———ネルや，よくお考えなさい。今はその方のことが嫌でたまらず気が向かない———ありうることです———でしょうが，いいですか，おまえはその方のことをまだ知らないのですよ。会ってから，まだほんの3，4日でしょう。もっとよく知り合えば気持ちが通じるようになるなるでしょう。おまえには本当のことを言います。それにお前が腹を立てようが立てるまいが自由です。わたしの知るおまえの性格からすれば———おまえのことはよくわかっているつもりですが———おまえは結婚前に愛を知ることはまずないだろうと思います。結婚式を挙げてから何カ月かが過ぎ，落ちついて，自分の伴侶として相手を受け入れるあきらめがついて，初めてお前は幸せな可愛い妻になれるでしょう。たとえその方がおまえの望み通りの人でないとわかっても，おまえはささいな欠点や過ちには目をつぶり，それらにあまりいらいらしたりすることはないでしょう。もしその方が妻の意見に耳を貸すだけの度量の持ち主ならば，きっとそういうことになるはずです。

そういうわけだからネルや，わたしはお前がフランス人のいう「灼熱の恋」に目覚めるのを待つなんて，夢みたいなことを言わないようくれぐれも望みます。いいこと，「灼熱の恋」などというものは「大いなる狂気」なのですからね。くどいようですがくり返します。何事によらず中くらいにするというのが知恵というものなのです。感情も熱すぎず冷たすぎないのが，いちばんなのですよ。ネルや，お前もわたしの年齢になれば———（わたしはお前のおばあさまなのですから，少なくとも60歳にはなりますが）こうした分別が若い時分には冷淡に思え，反発を覚えるものですが———英知から生まれたものだということを知るでしょう。おまえはむかし，いかにも子供らしく無邪気に言ったことがありました。「ねえ，シャーロット，わたしは思うのだけれど，若い女性は実際に申し込まれるまでは，恋に落ちるべきじゃないわ。」その時にどう答えたか忘れてしまったけれど，今ならじっくり考えた上で，こう答えましょう。「そのとおり———お前の言うことは正しい———お前がその心がけをいつも忘れないでいてくれることを願います。それをさらに拡大して確認しておきたいのだけれど，若い女性は申し込みを受けて，それから承諾するまでは恋に落ちてはなりません。結婚式が済んで新婚の半年が過ぎて，そうしてはじめて，女はおずおずと静かに少しずつとても良識的に愛しはじめるのだから。あまり愛しすぎて夫の酷い言葉や冷たい視線に心の底まで傷つけられるようなことがあったら，それは愚かというものです。愛するあまり夫の意向を法律と思うようになったら，夫の機嫌をとろうと顔色をうかがう癖がついてしまったら，彼女は愚かにもたちまち顧みられなくなることでしょう。むかし親戚の者の話をしたことがなかったかね。若い女性に恋した青年[2]が，やがて相手のほうがずっと自分に夢中であることを知ると熱が冷め，その女性に軽

蔑を感じたという話を。誰のことを言っているのかは，おわかりだね。でもけっして口にしてはなりません。わたしはふたりのことを観察しています。お前は物静かで穏やかで立派な娘ですから良い例ですが，メアリは残念ながら悪しき例です。ものおじせず大らかで心優しく，しかも献身的で物知りなのだけれど，奔放で素直すぎて自分の姿を見せすぎてしまうので，その本当の価値をわかってもらえないのです。メアリに神の祝福がありますように。あの娘よりも気だかい魂の持ち主――愛する人のためなら喜んで自分の命を投げ出すでしょう――に会いたいとは思いません。メアリの知性と教養は大したものですが，この前に来たとき[3]のあの娘の振る舞いには，ウェイトマンさんも呆れてしまいました。メアリのマナーが悪かったなどと思ってはなりません。ただ異様に高ぶって落ちつきがなかったというだけのことですから。でもそれがおよそ良くない印象をもたらしたというわけなのです。だからといってあの娘のことはわかっているので，わたしの評価は減じるものではありませんが，それでもはたしてあれが結婚できるかどうか疑わしく思います。

そろそろお便りを締めくくりましょう。結局のところ，なにも実のある助言などできそうにありませんから。言いたいことは一言です。その方がどうにも我慢できないというのなら，お受けするのは止めなさい。でも熱烈に愛せないからというだけで断るのはいけません。ウォルター・ミッチェル[4]なら――およそ愛のために死ぬなどありえないと思いますから――失恋の心配などしないで，少しくらい戯れても大丈夫でしょう。これは本気で言っているのではありませんし，この手紙の他の部分も少し冗談です。

同封した手紙はマーシーへのお返事です。ヘンリの手紙が着いたところですが，彼の説明でアンの説明よりいっそうわからなくなりました。彼は父親が問題であるということや，あなたに財産がないということに異論を述べる可能性もある，ということを言っています。エレン，この段階ではこの件については，なるべく人には教えずにいるだけの分別をお持ちのことと思います。マーシーにも同じように分別をもつ必要があることを言い含めておきなさい。受け入れるにせよお断りするにせよ，いったん決めてしまえば，たいしたことにはならないでしょう。牧師さまのヘンリは，女性というものは「イエス」のつもりで「ノー」という意見を強く述べておられます。とくに個人的なことを指してはいないとのことですが，ぜひそう願いたいものです。そうしたばかげたやり方には反対だということでは，まったく同感です。心の中では「イエス」と言いながら，舌はもつれながら「ノー」と言うなんて，ばかばかしいにも程があります。それともそれは立派な自己否定のつもりでしょうか。それこそわたしにはとうていできかねると告白します。たとえ1000ポンドもらっても，わたしにはそんな嘘はつけません。すぐにお便りください。状況を知らせて欲しいのです。どうしてわたしがヒポクラテスのこと[5]など好きなんて，お考えになったのでしょうか。それこそ「嘘」というものです。どこか素晴らしいところがないか探してみましたが，見つかりませんでした。

(1)St John Chrysostom(c.345-407)　雄弁な神学者で「黄金の口」のヨハネと呼ばれた。St Simeonはエルサレムの信仰家。幼いイエスを見て「主よ今こそみ言葉に従いてしもべを安らかに逝かしめたもうなれ」(Nunc Dimittis)と祈った言葉で知られる。St Judasヤコブの息子で十二使徒のひとり。

(2)ブランウェルとメアリ・テイラーのこと

(3)メアリ・テイラーは1840年6月にハワースを訪問した。

(4)Walter Michell　おそらく零細な製造業者で，エレンの姉アン・ナッシーの借家人。

(5)おそらく地元の医者のあだ名。

［1840年12月］[1]

通常，作家というものは自分の作品に強い執着をもつものですが，私はこの作品に対してそれほど未練を感じているわけではないので，さしたる苦しみもなく諦めることができるでしょう。3巻本でなければ事は始まらないとのお言葉ですが，見積もりが控え目すぎると申し上げます。というのも私には6巻分ほどの材料があったのですから。あのまま書き続けていたなら，きっとリチャードソンばりのものになっていたでしょう。ウェスト氏は私のサー・チャールズ・グランディソンに，パーシー氏はミスター・Bになっていたでありましょう[2]。婦人たちはパメラやクラリッサ，あるいはハリエット・バイロンといったところだったでしょう。わたしが描いていたそうした魅力的な計画を断念するのは，もちろんかなり残念なことであります。自分の頭で小さな世界を創り出し，そこに想像による以外には，父も母もないメルキセデク[3]のような住人たちを多く住まわせることは，啓発され益するところの多いものです。こうした人間たちと毎日ことばを交わし，彼らの家庭問題に関心をもち，彼らの過去に分け入ることで，実人生においてしっかりした尊敬すべき人物として，自分を印象づける考え方を身につけることができるからです。

頭の中では理想と現実はもはや別々のものではなく一連の合体したものとなり，そこからきちがいじみた顔つき，考え方，態度が生まれてきます。

50，60年前の『婦人の友』誌[4]が月桂樹のように青々と葉を繁らせていた時代に生を受けなかったことを残念に思います。そんな時代に生まれていたなら，文名を願う我が熱き思いもそれなりに歓迎されて，パーシー氏とウェスト氏を世に送り出し，2段組のびっしりと活字の詰まったページにかれらの言動をあますことなく書きつづっていたことでありましょう。『アルバート伯爵，または呪われた城』や『エヴェリーナ』『湖の隠者』また『シギスムンド』『尼僧院』など，そのほか感動的な素晴らしい作品と肩を並べて。『婦人の友』は読んだことがありますので，その内容は知っております。引用した作品の題名が正しいかどうか自信はありませんが，子どもの頃に古びた雑誌の数冊を手にして，こっそりと胸踊らせながら読みふけったことを覚えています。

その頃の辛抱強いグリゼルダ[5]たちの姿を，お見事に描いておられます。かくいう私の伯母もそんなひとりであり，今日にいたっても『婦人の友』の物語に勝るものは，くだらない現代文学にはひとつもないと申しております。私も同感であります。それらを読みましたのは子供の時分で，子供というものは感激する能力は絶大ですが，批判能力はまるっきりでありますから。

普通の出版社に原稿を送って，ウェスト氏とパーシー氏をたっぷり3巻本で眺めるというのはなかなかそそられます。しかし貴殿のご意見からして，私の才能を認め励ましてくれるマイケナス[6]が現れるまで，この貴重な原稿に鍵をして待つことにした方がよさそうです。それまでは若者なら薬剤師にでも，乙女ならマントか帽子の縫子に弟子入りすることにいたしましょう。

私の政治的意見に言及しておいでです。私のことをこちこちの保守主義者で，あの「温厚閣下」[7]を首班とする政党に属する者とお思いになられたようです。

仮に作品を書き続けていたならば，そのことを遺憾なくお示ししたところですが。老ソーントン[8]を分別のない偏見に凝り固まった保守主義者の代表としていたでしょう。またピュージー支持者[9]を導入して，高等派教会をウォレンの最高級靴墨[10]で磨き上げていたかもしれません。

私が男性なのか女性なのか，弁護士の事務員か本好きの縫子か，決めかねていることを嬉しく思います。それを知る手助けは一切しないつもりですし，私の筆跡や文体やイメージの女性らしい仕掛けから結論を引き出してはなりません。若い男性のなかにも髪をカールさせたりコルセットを身に着けたりする者もありますし，若いご婦人でも見事な手綱さばきで馬を乗りこなす方もいらっし

ゃいます。さらに私が代筆人を雇っているということもありましょう。

冗談はさておき，ご親切で率直なお手紙を下さり感謝にたえません。自分が男なのか女なのか，ＣＴ[11]なる文字がCharles Timなのか，Charlotte Tomkinsなのかも明かそうとしない，無礼な匿名作家による小説ともつかない代物をわざわざお読みくださったことに驚嘆しています。

(1)Hartley Coleridge(1796-1849)宛ての手紙の下書き。W&Sでは誤ってワーズワース宛てとなっている。ハートリーはS.T.Coleridgeの長男。
(2)Arthur Ripley WestもAlexander Percyもシャーロットの初期作品'Ashworth'の登場人物。
(3)Melchisedecはサレムの王で祭司。創世記第14章第18節。
(4)正式な名称は*The Lady's Magazine: Or Entertaining Companion for the Fair Sex*。1770年発刊。
(5)Patient Griselda　ボッカチオ，デカメロン，ペトラルカなど中世ヨーロッパの物語中の人物。夫の侮辱や残虐な仕打ちに耐える貞淑温順な妻たち。
(6)Maecenas　古代ローマの政治家。ホラチウスおよびウェリギリウスの後援者。
(7)おそらくRobert Peelのこと。
(8)Sir Abraham Thorntonこと。
(9)既出〔1840年４月７日？〕付けの手紙の注(6)を参照のこと。
(10)Robert Warrenが設立した靴墨会社。
(11)シャーロットが初期作品で使用していた筆名Captain TreeあるいはCharles Townshendの略か。

1840年12月10日[1]

拝啓

お便りを頂戴し，まるでウィルソン教授[2]からブラックウッズへの投稿許可を頂いたかのように嬉しくてなりませんでした。たしかにあまりお世辞は言っていただけませんでしたし，夢膨らむような明るい見通しもありませんでしたが———それでもあなたが誠実に紳士的なお便りを下さったことはわかりました———率直で丁重なお返事にたいへん感謝しております。紳士らしからぬパーシー氏とウェスト氏では，キリスト教国のいかなる編集者にも感銘を与えられないとのことのようです。ですから数滴の涙と大いなる苦痛をもって彼らを忘却の彼方へ追いやるつもりですが，それを乗り越えられることを願っております。

これを３巻本に引きのばせたのでは，という見積もりはかなり控えめというものです———リチャードソンばりの調子と粘り強さで，昼夜なく紡いで３倍の長さにはできたことでしょうが，貴殿は多くの無情なアトロポス[3]のように，始まったばかりのところで運命の糸を断ち切ってしまわれたのです。もしサミュエル・リチャードソン殿が，ミス・ハリエット・バイロンやミス・ルーシー・セルビーの手紙を見ていただこうとお送りになっても———それらはじつによい手紙なのです，ミス・ハリエットは死なんとする白鳥のように自分の賛歌を歌い上げ，彼女の友人たちが荒れ野にいる野ろばの群のようにコーラスに加わるのです———あの不滅のサー・チャールズ・グランディソンに対しても，あなたは躊躇することなく同じようになさったことでありましょう。自分の頭で小さな世界を創り出し，たくさんのメルキセデクのような人たち———“父もなく母もなく子孫もなく，人生の始まりも終わりもない”人々を住まわせることは，啓発的であり有益でもあります。そうした者たちと日々言葉を交わし，彼らの華麗な衣装や美しい顔立ちに目を慣らしているならば，実人生において尊敬すべき人物として自分を印象づける心のあり方というものを身に着けるのに役

立つことでしょう。そうした世界に慣れていれば“孤独の喜び”[4]と言われる‘心の眼’の網膜に，彼らの姿形がいかに鮮明に刻みこまれるか気づくことでしょう。彼らのなかにはひどく醜い者もあり———例えとしては頭のおかしい異教徒がその寺院に刻んだグロテスクな像以外にないでしょう———また，ある者たちは不自然なほどの美しさで圧倒するでしょう。その顔立ちはまるでピュグマリオリオンの塑像[5]が———その彫琢された顔立ちに精気があふれ，その見えない大理石の眼に明かりが灯り始めたとき———彼を圧倒したであろうように。

私は自分が40年から50年ほど前の，婦人雑誌が青々とした月桂樹ように生い茂っていた時代に生まれなかったことが残念でなりません。そうであったなら文名を求める私の大望もそれなりに激励されていたでしょうから。パーシー氏とウェスト氏は彼らにふさわしい舞台でヒーローとして登場し，ダーウェント修道院や大修道院あるいはエセリンダの著者たちと栄冠を争っていたかもしれません。私は『婦人の友』を読んだことがあり，その内容もいくらか知っております。もっとも引用した作品の題名が正しいかどうかおぼつきませんが。というのもそうした物語に載っていた古びた印刷物を読んだのは，もうかなり以前のことですから。私はそれらを休日の午後の楽しみに，あるいは習い事をしていなければならないときに，こっそりと読んだものでした。あれほど面白いものにはもう二度とお目にかかれないでしょう。ある陰鬱な日，ばかげた恋愛物語が載っているからと言う理由で，父がそれらを燃やしてしまいました。本当にあの頃に生まれていたなら，『婦人の友』に投稿できたのにと残念です。

普通の小説の出版社に送って———そして私の人物たちをたっぷり3巻本で眺めるというのはなかなかそそられます。しかしこの大切な原稿には鍵をかけ，少なくともある種の目的を持ってなにかを生み出す分別がつくまで待った方がよいでしょう。それまでは若者なら薬剤師にでも，乙女なら帽子や洋服の縫子に弟子入りした方がよさそうです。

私の政治的意見に言及しておいでです。私のことをこちこちの保守主義者で，あの「温厚閣下」を首班とする政党に属する者とお思いになられたようです。仮に作品を書き続けていたならば，そのことを遺憾なくお示ししたところですが。老ソーントンを分別のない偏見に凝り固まった保守主義者の代表としていたでしょう。またピュージー支持者を導入して高等派教会をウォレンの最高級靴墨で磨き上げていたかもしれません。

私が男性なのか女性なのか，弁護士の事務員か本好きの縫子か，決めかねていることを嬉しく思います———初めはこのことについて謎をかけるつもりはありませんでしたが———たまたま最初に糸口を示すのを省いてしまったので，今はわざとそれを伏せてみようという気持ちです———私の筆跡や，貴殿が指摘する文体やイメージの女性らしい仕掛けについては，それから結論を引き出してはなりません。若い男性のなかにも髪をカールさせたりコルセットを身に着けたりする者もあります———リチャードソンとルソーなどは，ときどきまったく老女のような書き方をします。かと思えばブルワー，クーパー，ディケンズ，ウォレンなどは，寄宿学校の生徒のように書きます。冗談はさておき，ご親切で率直なお手紙を下さり感謝にたえません。自分が男か女かも明かさず，ＣＴがCharles TimsなのかCharlotte Tomkinsなのか知らせようともしない，礼儀をわきまえない匿名作家の半小説をわざわざお読み下さったことに感謝申し上げます。

どのようにしてあなたのことを知るにいたったのか———あなたの住所を，そしてまたあなたの助言を求めようと思い立ったのかおたずねですが，こうしたことは謎にしておきましょう。何事かを自分の手中においておき，バーレー卿に対して頸を横にふり，たとえ手紙の中でも知恵者で重要人物とみせかけることができるのは愉快なことです。

あなたをお父上と間違えたわけではありません。

(1)ハートリー・コールリッジに送付した手紙。
(2)John Wilson(1785-1854)　'Christopher North'の筆名で『ブラックウッズ』誌の記事'Noctes Ambrosianae'を1822年から1835年まで執筆した。
(3)運命の3人の女神の一人で，運命の糸を切る役。
(4)ワーズワースの詩'I wondered lonely as a cloud'から。
(5)自作の象牙像にほれこみ，アフロディテがこれに生命を与えて生きた女性にした。

(1996年8月31日受理)